

シリーズ 授業と生徒を語る

## 私の「自己表現」・・・栄養専門学校で教えて

加藤 淳子（元会員・東京在住）

### 教科書使わず 添削せず

多摩地区にある栄養専門学校から講師の依頼を受けたのは、あの大震災の二日前のことであった。三十年余り勤めた都立高校を退職して十年経っていた。ブランクは大きく、自信はまるでなかったが、試行錯誤するうちに、自分なりのカリキュラムが作られた。ここに報告するのは三年目の二〇一三年四月から七月まで十五回（九十分）の授業。対象は管理栄養士科一年生四十二名である。

私に与えられた科目は「文章表現・文章読解」というフアジーなもの。時間を割を見ると、四年まで国家試験向けの理系の科目がびっしり。合格率等を意識しなくていい、数少ない科目の一つだ。どうせなら楽しく息抜きできる場のように、と思った。教科書は使わず、毎回私がプリントを用意した。学生の顔写真は不可欠だから、教務に特別にお願いして年度初めに用意した。授業の際の鉄則はひとつ。私の説明は極力避ける。字や語法の誤り以外添削もしない。書かせたものから選んで全員にもどし、読み合わせる。字も名前も、多くはそのまま。それだけである。

第一回は、星野富弘の短い随筆を軽く読解したあと、「独楽吟」のパターンで短歌を作らせる。軽い自己紹介のつもり。何首か紹介する。

たのしみはひもを結んでストレッチ自分のレーンを走り抜くとき

たのしみは祖母から届く米と野菜重みかみしめ手に受けるとき

たのしみは近所の犬とたわむれて吠えられ倒されお手されるとき

たのしみは空っぽの財布耐え忍び月の初めに口座見るとき

たのしみは育てたミント収穫し手に残る香をひとり嗅ぐとき

### 表現するに足る「自己」をみがくのよ

翌週、その作品一覧のプリントを配布。各自が選んで点を入れたあと、高得点の作者を紹介、作者が自分の歌を読み上げ、私が「突撃インタビュー」。笑いが出る。いい雰囲気。「表現ってね、つまるところ自己表現なのよ。表現するに足る「自己」をみがくのよ」と強調。

この後数回は、「うた」、すなわち韻文を扱う。詩や俳句をいろいろ読み、感想を書かせたり、ことばあそびうたを創作したり。その中から「かぞえうた」を二編紹介する。Aはいかにも栄養専門学校生らしい。Bは自閉傾向の二十歳の作。二か月後「猫」という作品を書いた。

#### A かぞえうた

ひとつ ひとりの夕ご飯 むつつ むらさきちよと足して

ふたつ 双子のたまごかな なたつ なつかし母の味

みつつ 三葉も忘れずに やつつ やっぱり甘めかな

よつつ 夜明かす鶏肉で ここのつ 心も温まる

いつつ いつもの鰹出汁 とおとお 完成親子丼

#### B かぞえうた

ひいは ヒヨドリ 鳴いて飛ぶ

ふうは フクロウ 目玉がぎよるり

みいは ミミズク お耳がとがる

よの ヨタカは 夜飛ばない

いーつ イッコウチヨウは ほっぺが赤い

むうは ムクドリ くちばし黄色

なーな ナナクサイッコの 虹色ドレス

やーは ヤツガシラの 大きな王冠

ここのつ ココノエイッコの おべべは紅い

とうで トウゾクカモメが 逃げた

## 散文「忘れられないうじわらじ」

五月末、散文に入る。教材は「料理歳時記」（辰巳浜子）、「日本の米」（富山和子）、「子どもたちに贈る十二章」（真弓定夫）など。並行して随筆「私の食体験」を書かせる。学生の作品には「鯉の切り込み」（青森）、すんき漬け（長野）、しもつかれ（栃木）、桜納豆（熊本）、かるかん（鹿児島）など、郷土料理自慢が並んだ。書かせるたび、教編選んで全員に読ませながら、良い文章の条件とは何か、常に問いかけた。

九回目の六月十四日に書かせた「忘れられないできごと」から二編紹介する。新学期から二ヶ月、クラスの中にも交流が生まれたようだ。Cの筆者は地方の全寮制高校出身の二十歳。Dは二十三歳で、大学の園芸科を卒業している。学生たちと私の間も、この頃からグツと近づいた気がする。

### C 創、傷から生まれるなにか

彼は文武両道で発言力も影響力もあり、ただ生活態度は非常にだらしなかった。そんな彼と大喧嘩したのは、高校二年の夏休み直前。理不尽な注意を受け、私は溜まりに溜まった感情を抑えることが出来なくなった。ポロポロの水車がぎしぎし回る隣で、私たちは互いの不満をぶつけ合った。ずっと怖くて言えなかった言葉が、涙と一緒に次から次へと溢れてきて、最後にはまるでぬけ殻のような自分だけが残った。涙でぐじゃぐじゃになった私と、落ち着いている彼は、最後にぎゅっと握手して、それぞれの寮に帰っていった（帰寮の門限はとっくに過ぎていた・・・）。

次の日、朝食の時に「おはよう」と何事もなかったように挨拶を交わし、その後もいつもと変わらない日常を過ごした。しかし今も、お互いにこの大喧嘩のことは、忘れられない出来事として残っている。あの日、お互いにつけた傷から新しい関係性が創られていったことを、思わずにはいられない。

### D 文化の違い

深夜着の飛行機で初めて降り立った異国の地、タイ・チェンマイ。ルームメイトは現地の女の子二人。もちろん言葉は通じない。

蒸し暑い雨季が終わり、すぐに冬がやってきた。熱帯の国といえど、北部の田舎町は真冬の最低気温十二度。私の居た学生寮では、毎日水のシャワーを浴びなければならぬ。引き出しに入れた飴にアリがたかるのも、枕元のゴミブリと一緒に寝るのも全然平気だったが、真冬の水シャワーだけは苦痛だった。同じ頃、ルームメイトたちとも衝突した。私への見せしめのような張り紙や態度。私はついに耐えられなくなり、何も言わず部屋を出ていくことにし、荷物をまとめた。すると、ルームメイトが不思議そうな顔で声をかけてくれ、話し合うことができた。拙い言葉のやりとりで、衝突は全て文化の違いから生じたものだったことが分かり、すぐに和解した。自分は言葉だけでなく異文化も学びに来たのだと、恵まれた環境に感謝した。それから冷たいシャワーも、全く辛くなかった。

今ではそのルームメイトたちも、何でも話せる気の置けない親友になっている。

## 800字で評論 「私は猫が好きだ」

十三回目には「世界がもし一〇〇人の村だったらくたべもの編」の抜粋を与え、初めての八〇〇字で評論を書かせた。一四回目も同じく八〇〇字で、全くの自由題。この二編を期末テストの代わりとした。Eの「猫」は、この時提出された。最終回は、自分の学習の総括とし、授業の感想も書いてもらった。

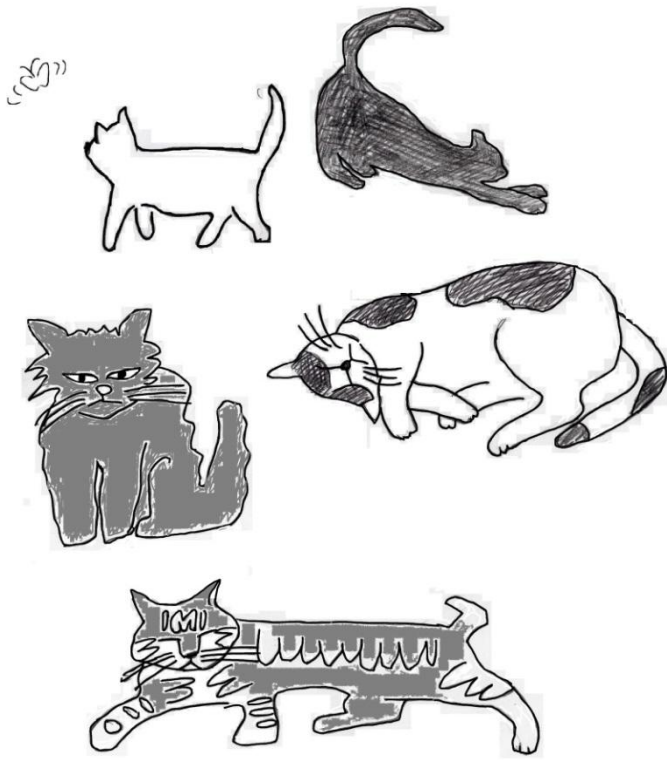
### E 猫

私は猫が好きだ。

というより、私が生まれたときには、もうすでに猫が五匹も先に生活をして居たので、好きとか嫌いとか言う以前に、居て当然で、居ることが普通だった。

初めて見たものを親と思うように、私の方は最初から家族と認識してしまっていたのかもしれない。しかし、誇り高い先住の猫たちは私をなかなか家族とは認めず、例えば家ですれ違っても「なんだあんたか」くらいにしか思って貰えなかったが、それでも何となく和気あいあいと生活して行けたのは、猫が持っている、人に対する無関心さが幸いしていたからかもしれない。猫たちは私を六番目として扱い、格下に甘えるなどという隙は決して見せなかったが、それでも、歳を取るにつれて段々と寛容になって来たためなのか「まあしようがない」とでも言うように、傍に寄って何か話していくこともあった。

それはほんの少しの触れ合いだったけれど、私はそれでどんなに癒されたか  
しれない。  
その猫たちも、もう居ない。



どの猫も、人間の年齢でいうと八十歳から百歳くらいまで、平均以上に長く生きてくれたが、それでも後から生まれた私と、いつまでも共に生活してくれるわけではないのだ。

家の中のあちこちにある、猫たちが生活していた痕跡も少し薄れかけて来ている。それでも時々、どこからか声が聞こえてくるような気がするのだ。

そんな時は思わず振り返ってしまう。

居ないのはわかっているのに。

今の自分をどう見ているのだろう。相変わらず、何だかしょうがない奴だなあ、と思っているのかもしれない。そう思うといつも、少し泣きたくなってくるのだ。

## 「何でも隠さず書いていいんだな・・・」

学生たちは言う「クラスメートの文章を読むことで交流が深まった」「先生がいつも元気で開放的で、嬉しかった。だから私たちも、何でも隠さず書いていいんだなと思えた」と。教室に居る時の私は、実人生の不幸や困難を忘れて、思いきり元気だった。それは彼らの若さのおかげだろう。また、この虚妄にみちた世の中で、「ひとのぬくもり」だけが確かなものと、私が思うからだろう。一年半経ったが、今も五人の女子学生と文通がある。昨年十一月には、Cの筆者に案内されてその母校を訪ねた。夜行寝台に乗って、女子寮に泊まって。鮮烈な体験であった。暮には四人が我が家を訪れた。一品持ち寄りの忘年会は、夕方五時まで続いた。楽しい一日であった。

学生たちの自己表現の場に立ち合うこと、それはとりもなおさず、私が自分自身を精いっぱい発信することであった。私の「自己表現」であった。そうして生まれた若い魂との交流は、かけがえのない私の財産である。